

創学舎ニユース

No.236

世界が敵に

まわった日(その4)

プロ野球の選手になった、母校の先輩との出会いは、自分にとってこの上ない喜びであった。

約八ヶ月間、毎日のように見えて、私を指導して下さった。今思えば、完全なアマ・プロの協定違反だが、当時はそんなことは考えもしなかった。小細工はなし。とにかく、いかに体を正しく使ってムリのないフォームで速い球を投げるか。ひたすらそれだけを指導してもらった。エースはいたのだが、何故か先輩は彼にはほとんどアドバイスすることはなく、私ひとりにエネルギーを注いだ。

球がぐんぐん速くなる。シュール、スパーン！今まで聞いたこともない音がするのが快かった。毎日が充実していた。でも一方で、私はどこか引いてもいた。エースが悔しがっているのを感じると、つい力をセーブするのである。何ということだろう。何を気にすることがあるのか。今思うと、この時期でさえ、全力投球はしていなかった。いや、本当に何ということだろう。後悔である。大きな後悔である。そういえば、

自分にはこんなことが多かった。試合でもヒットを打つと、それはうれしいのだが、相手のピッチャーが悔しがっているのを見ると、申し訳ないと思ってしまう。中学のときは、自分のこんな感覚をおかしいとは分からなかったが、成人してから、そのことをスポーツに秀でた人に語ると、ことごとくげん顔をされた。そうなんだ。自分はおかしいんだ。

さて、話を先輩にもとそう。先輩のおかげで、私は本当にいい思いをすることが出来た。私の恩人、まちがいがなく恩人のひとりである。そして、実はその先輩と、三十年を経て再び縁がなくなることとなる。それは、こんな出来事による。

数年前の三月のこと。私の母は、近所のいとこの家によく遊びに出かけるのだが、その日はいつもと違って帰りが随分と遅くなってしまった。辺りは真つ暗。急いで帰ろうとするあせりと、通い慣れた道からくる安心感からか、母はミスを犯した。急坂の中央を通らず、端を通過して足を踏みはずし、数メートルの高さの土手を転げ落ちてしまったのだ。八十才になった体には過酷な状況である。足と腰をしたたかに打ってしまった母は、身動きすることも出来ず、そのまま道端に横たわっていた。人家はまばらで、通る人もなく、助けを呼ぼうにも声も出ない。何時間横たわっていたのか、その間に車が数台

通ったが、母に気付いて止まってくれることはなかった。そして、しばらくして、また一台の車が通り過ぎた。と、急ブレーキの音。方向転換した車はもどつてくると、ゆっくりと母の前で止まった。

「どつしました？ん…。小林さんじゃないですか。」そこには、母の知人である男性が立っていた。母が、状況を説明すると、その男性は母を抱きかかえて車に乗せ、救急病院へと運んでくれた。そして、医者への状況説明から、入院の手配まで、全てこなしてくれたのである。

幸い、足はネンザで済み、母は二ヶ月の入院を経て体力も回復。昔と変わらぬ生活を送っている。「あんな元気な八十代はいない。」と近所の人にいわれると、私もうれしい。これも、あの夜のあの男性がいたからこそ。そして、彼こそ、私に野球を教えてくれた先輩であったのだ。

先輩に対して、私はどれ程感謝しているか分からない。野球で自信をつけさせてもらったこと、そして母を救ってもらったこと、言葉では尽くせない。一方で、申し訳なさも感じている。先輩は、進学校で野球の強豪でもある学校(そこには先輩の恩師がいらっしゃった)に進むよう助言をして下さり、また恩師にも話を通して下さったらしい。しかし、学区制の事情でそこは受験せず。またその前に中学でも、結果は残せずに終わる。学区制は、知り合いに頼んで越

境すれば済んだことだし、部活ももっと「おれが、おれが…」と前に出れば好転したはず。本当に、性格とか気質とかいうものは大事である。と、つくづく思つのである。(以下次号)

(小林)

勉強に

集中できないときの解決策

創学舎は、現在四教場。小中学部が、新松戸、布施、柏の三ヶ所。大学受験部が、柏駅前一ヶ所。小中高あわせて、かなりの数の生徒が通ってくれている。私自身は、毎週二百人余の生徒に接していて、充実した時間を過ごさせていただいている。これまで教えてきた生徒は何千人にもなるだろう。有難いことである。

さて、そういう経験からいうのだが、今まで「やる気のない生徒」は、まず一人もいなかった。それぞれに「やる気」は持っていると思つている。ただ、「やる気」の強さの差が、生徒の学習状況を大きく左右しているのだ。勿論、これまでの学習量、家庭環境、現時点での能力など、いろんな要素も影響することは間違いないが、「ここ」では「やる気」について更に検討する。

さて、「やる気」は「ずつとそのままなのか？」「やる気」の差は「ずつと埋まらないのか？」否である。「やる気」は育つのである。少し勇気を出

して、少し工夫をしていけば、少しずつだが強くなっていくのである。そう、きみの「やる気」も、もっと強くなれるのだ。

では、どうすればいいのか？それは、毎回毎回の勉強を成功させることである。今日一日を、上手く過ごせるようにすることである。その積み重ねが、「やれる」もつとやうつと、きみを変えていくのである。更に、では、毎日の勉強を成功させるにはどうすればよいのか？これもまた、いろいろポイントがあるが、今回は、一つだけに絞って、集中力のことを話そう。

生徒と話をするとき、「やるう」と思うのに、集中できない。「という悩みをよく聞く。学校であったイヤなこと、友人とのめんど、親との口ゲンカなど、不愉快なことが頭の中を支配している。そうでなくとも勉強を、一時間もすれば疲れて飽きてくる。そんな状態のまま、机に向かっていてもダメ。といって、テレビをみたり、音楽をきいたりすれば、もつ勉強にはもどれない。そして、一日が終わるとき、後悔をする。こんなところだ。

実は、いくつか、とっておきの方法がある。集中できないと思ったら、即やめて、五分間体を動かすことである。長すぎたはいけない。具体的にいえば、まず有効なのが「五分間手洗い」。前もって親に頼んでおくのである。「勉強できないとき、五分間だけ手洗いをさせてね。」実は、

これには、父母の協力が欠かせないので、この項をお読みの方は、是非配慮していただければ幸いです。次に「シャワー」。冷水と温水を交互に浴びると、もやもやもぶつとぶ。そして、三つ目、「五分間散歩」。家の周りを歩くだけでもよい。

以上、三つ紹介したが、これは、人間の「心と身体」の理屈に、うまく合っているのだ。例えば、転んで足を負傷したとする。その前まで、頭の中でよくよく考えていたことがあっても、「痛い」という感じだけで全身が埋まってしまふ。その瞬間、「くよくよ」は消えている。つまり、体への刺激は、一時的な気分完全に勝るのだ。いいかい。集中できないときは、五分間だけに刺激を与える。勿論、実行するしないは、きみ次第である。(小林)

教育「名言」の紹介(11)

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、「生涯消えることのない」「センス・オブ・ワンダー」=「神秘さや不思議さ」に目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

《出典》レイチェル・カーソン(アメリカ・一九〇七 六四『センス・オブ・ワンダー』) 解説 センス・オブ・ワンダー。神秘さや不

思議さに目を見はる、生き生きと新鮮で、驚きと感激に満ちあふれた感性。美しいもの、畏敬すべきものへの直感力。熱心で繊細な好奇心。それは、なんら目新しいことではない。子ども頃は、だれもがみんなもっていた。むろん、子どもの頃の、狭く退屈な日常生活と抱き合わせに、それでも、小さな驚きはあつたし、喜びや悲しみは新鮮だった。そうした、だれもがどこかで身に憶えのあるセンスのことである。

そして続ける。もし妖精に頼らないで、子どもたちのそうしたセンスを守ろうとするなら、「感動、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくともひとり、そばに必要があります。でも、自然のことなどよく知らない。子どもに教えることなどできない。そう言つて、大人は困惑してしまうのだが、それでよいのだと言つ。子どもといっしょに、新鮮に驚けばいい。世界の不思議に目を見はらばいい。そして、しばらく使っていない感覚の回路を開いてゆく。日頃は、見ているよつで見過ごしている。その見過ごしていた美しさに目をとめる。雪の結晶の一つひとつ。花のつぼみの複雑きわまる不思議な形。その美しさに思いをとめるよつになると、人間サイズの尺度から解放たれて、自然の流れが感じられ、自然の一部にすぎない人間の存在に気がつくよつになるよつのである。

レイチェル・カーソンは、一九〇七年、米国ピッツバーグ近郊に生まれ、数冊の本を残し、もの静かな女性として、五六歳で亡くなった。その静かな彼女が書き残した一冊の本、『沈黙の春』(一九六二)こそ、環境汚染という、今日最大の問題に、人々の関心呼び覚ました警告の書だった。それは農業をめぐる話である。奇跡の化学物質DDTの発見によって、人類は害虫との闘いに勝った。人々は、そう確信していた。そして、その農薬は、害虫だけを殺し、人や鳥には無害と聞かされていた。しかし、実際は、どうだったか。鳥を殺し、自然を壊した。それを、静かに、報告した本。告発というより、痛みをともにした本だった。人間を支えてくれる自然に対する慈しみに満ちた本だった。『センス・オブ・ワンダー』は、遺作となったエッセイ。甥と一緒に海辺を散歩しながら、夜空の星の下に「たたずみながら、自然の営みに思いを寄せた、美しい随筆である。(アガトス教育研究所)

卒業や転校等で創字舎を離れる方にも、「希望があれば、創字舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。